

放射線科入院患者における外泊の意義を知る

The role of stopping out for the patients who were treated with radiation therapy

西2階病棟：沼田 裕子・堀 美代子
医療短大：柳沢 節子・玉井真理子

【要旨】

目的) 悪性腫瘍で入院中の患者について、外泊の実態を調査し、外泊の患者に及ぼす身体的、精神的、社会的な効果を明らかにする。

方法) 対象は、平成9年3月から5月までに当院放射線科に入院した患者20名である。男性11名、女性9名で、年齢は27才から80才で、年齢の中央値は58才であった。調査は外泊後の聞き取りを中心に行った。抽出した患者の表現を気分転換（自然への親しみを含む）や、役割遂行などに分けて分析した。

結果) 気分転換ができたと評価された外泊は34回のうち29回に認めた。全身状態（パフォーマンスステータス：PS）が不良な患者においては、自然への親しみができた外泊は3回の外泊ですべてに認められた。家庭や社会での役割遂行ができたと評価された外泊は、34回中26回にみられた。

結論) 外泊は、自己を取り戻す気分転換、役割遂行の面で有用と思われた。我々は看護的援助の一つとして外泊を奨めていく必要があると思われた。

キーワード

外泊、悪性腫瘍、気分転換、役割遂行

1. はじめに

日本においては欧米に比べ入院期間が長いと言われており、その原因の一つとして悪性腫瘍があげられる。入院期間の延長は患者のQOLを低下させたり、患者の家族内での役割が変化するなど、何らかの問題がoccurり看護介入が必要となる。外泊は気分転換や家族および地域との交流の中で患者の闘病意欲を高める機会となっていると考えられており、長期入院患者において外泊の有用性が示唆されている。本研究の目的は悪性腫瘍で入院中の患者について、外泊の実態を調査し、外泊の患者に及ぼす身体的、精神的、社会的な効果を明らかにすることにある。

2. 対象および方法

対象は、平成9年3月から5月までに当院放射線科に放射線治療または化学療法を目的に入院した患者20名である（資料1）。男性11名、女性9名で、年齢は27才から80才までで、年齢の中央値は58才であった。このうち6名は65才以上の高齢者であった。

調査は外泊後の聞き取りを中心に行い、一部に患者本人の自由記載も用いた。「外泊中何をしてきたか?」「良かった事」「外泊中困った事」「外泊に望むこと」といった項目を中心に患者の表現を抽出した。抽出した患者の表現を、気分転換（自然への親しみを含む）、役割遂行、身体的事項（食事、排泄、睡眠、疲労）に分けて分析した。患者が複数回外泊した場合には、毎回聞き取り調査を

行い、一人の患者であっても抽出した表現をそれぞれカウントし、のべの外泊回数で抽出できた表現回数を算出した。

3. 結果

以下の項目につき評価可能であったのべ34回の外泊分について検討した。

1) 気分転換

「家でぶらぶらしていた、のんびりできた」、「ゴロゴロしていた」、「外の空気にふれ開放感があった」などの言葉より、気分転換ができたと評価された外泊は34回のうち29回に認めた。

また、全身状態が不良な症例(PS:4)の自然への親しみを検討してみると、「庭の花や鳥をながめていた」、「寝ているだけだったが、違う景色が見れてよかった」などの言葉より、自然への親しみができた外泊は3回の外泊ですべてに認められた。

2) 役割遂行

「農作物の種子の注文をしてきた」、「家の雑用や草取りなどが少してきた」、「私のことを心配してくれる家族がいる幸せを感じた」などの言葉より、役割遂行ができたと評価された外泊は34回中26回にみられた。性別では男性16回中8回、女性18回中18回みられた。

3) 身体的側面

食事に関しては、入院時より良好であったとの表現が34回中9回で、また入院時より不良であったとの表現が2回みられた。

排泄に関しては、入院時より良好であったとの表現が34回中2回で、また入院時より不良であったとの表現が1回みられた。

睡眠に関しては、入院時より良好であったとの表現が34回中2回で、また入院時より不良であったとの表現はみられなかった。

疲労に関しては、入院時より良好であったとの表現が34回中10回で、また入院時より不良であったとの表現が10回みられた。

4. 考察

外泊とは自らの主体で生活するあるいはしなければならないという意味で大きな意義があると言われている。患者の外泊は本来的な自己の在り方に戻れる時である。気分転換とは患者が苦痛を感じる度合を少なくすることであり、その人自身でいられること、通常の生活に少しでも近づくことができるようになることと考えられる。今回の調査においても外泊には気分転換と役割遂行といった二点の意義があることを再認識できた。ブラブラ、ゴロゴロといった一見入院中と同様の過ごし方も、患者にとっては物理的な条件および精神的な条件とを備えられている家庭では気分転換になっていると思われた。また、身の回りのこともできず終日臥床している患者(PS:4)にとっては、自然の移り変わりを感じられたことが良かったとしている。目的を持って外泊する患者の場合は当然役割が果たせた喜びは大きい。家庭、地域での行動の中には役割遂行に通ずるところが多々ある。一般的には女性の方が役割意識が高いという報告がある。今回も家での役割は女性において多く満たされる傾向がみられたが、反面体力の減退や病状悪化により思い通りにならないはがゆさもあることを忘れてはならない。また家族と日常的な生活を過ごす中で、心が癒され、自分の存在感を認

識し、家族の情緒的サポートを得ることで闘病意欲につながっているものと思われる。身体的側面においても、外泊により生活の基本である食事、排泄、睡眠などを良い状態に持っていくことが可能と考えられた。

5. まとめ

外泊は、自己を取り戻す気分転換、役割遂行の面で有用と思われた。我々は看護的援助の一つとして外泊を奨めていく必要があると思われた。外泊を奨めるに当たっては、現段階の身体的、精神的状態を把握することが重要と考えられた。

[参考文献]

- 1) 田代順子：患者の外泊；その意義と問題 — 今日の医療と現状と問題をめぐって —, 看護展望, Vol.6, no.8:p673-679, 1981.
- 2) 牛山フミ：外泊の観点からみた患者の自立, 看護展望, Vol.6, no.8:p680-685, 1981.
- 3) 日下きみ他：予後不良患者の外泊の意義, 看護展望, Vol.6, no.8:p692-695, 1981.
- 4) 黒田晶子他：ターミナル期における外泊の有効性, 看護雑誌, Vol.52, no.12:p1203-1207, 1988.
- 5) 皆川ゆかり：患者の楽しむ空間を持っていますか？ — 病棟での気分転換, 遊びの工夫など, ナーシングトウデイ, 11:p66-69, 1993.
- 6) 五十嵐倫子他：ターミナル期にある患者の外泊に向けての援助 — ターミナル期に外泊できた2事例の体験から —, 死の臨床, Vol.18, no.2:p106, 1995.
- 7) 山田雅子他：化学療法を受けている癌患者のQOLについて — 入院医療と在宅医療の比較から —, 看護研究, Vol.30, no.5:p77-86, 1997.

資料①

ケースNo.	性別	年齢	病名	P.S	告知の有無	入院期間
1	女	60	口腔癌	4	無	146
2	男	49	肝臓癌	4	無	96
3	女	33	乳癌	2	有	72
4	男	63	胆管癌	4	有	69
5	男	63	食道癌	2	有	59
6	男	80	食道癌	2	有	38
7	男	45	肺癌	2	有	82
8	男	37	急性胃腸炎, 不明熱	2	有	43
9	男	68	鼻腔リンパ腫	2	有	109
10	女	73	悪性リンパ腫	1	有	56
11	女	67	悪性リンパ腫	2	有	194
12	男	24	ホジキン病	1	有	23
13	女	53	子宮体部癌	1	有	17
14	女	27	悪性リンパ腫	1	有	64
15	女	78	悪性リンパ腫	2	有	123
16	男	62	脳腫瘍	2	無	59
17	女	56	乳癌	1	有	40
18	男	31	悪性リンパ腫	2	有	64
19	女	47	乳癌	3	有	51
20	男	66	肝臓癌	2	無	18

男性11名 女性9名 平均年齢 54.1才 65才以上6名 65才未満14名
平均入院期間 71日